

# 明石屋建具製作所 畑 虎之輔さん(47)

加古川市上荘町国包

## 播磨の企業 老舗シリーズ

老舗シリーズ

⑥

昭和五(一九三〇)年に県内務部統計課(現・県統計課)がまとめた冊子「県工場一覽」にこうある。

建具製造業、明石屋建具店、明治二十六年創業。

加古川市東北部の国包(くに)かむ)地域では、他に三つの工場が紹介されているが、明治創業は明石屋だけ。現在、同市の地場産業として知られる「国包建具」の中では最も長い歴史がある。

国包建具は、江戸時代末期、加古川を利用した木材運搬の集散地だった国包に木工業が芽生えたのが興り、とされているが、明石屋に伝わる話は、もっと具体的だ。

「西脇から木を運んで来て高砂で買いたたかれる。そんな安値なら戻る途中で国包に下ろした。もともと国包には農具の唐箕(とうみ)を修理する職

精度の高い製品に伝統の技が生きた。加古川市上荘町国包、明石屋建具製作所

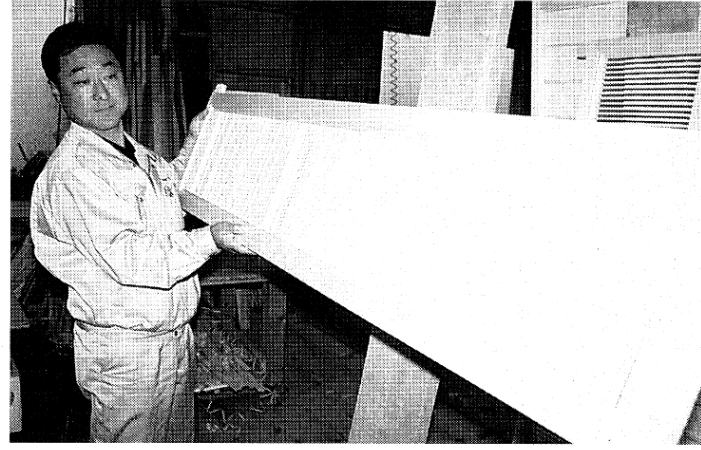
の丸太をノコギリで切る専門の木引(こびき)職人さんもいました。今は和風建築も減りました

「昔の日本建築は大工から建具屋、表具屋など専門の職人たちが集まって一軒の家を建てていました。建具でいえば、材料は木の一番太い部分を使うので、最低でも直径三十センチ以上が必要。昔から建具にはスギ、ヒノキと決まっていますが、今では外国産がほとんどで、国内産のいい木はなかなか手に入らないのが現状です」

「技術面で気にかけているところは、精度です。木が反ったり、ねじれたりして製品に誤差が出ると、建てつけが悪いと言われる。職人は材木の断面を見れば、木なんかありません。戦前は製ば、価値がすぐ分かる。戸は両面あるので節があつたら使えない。

## 国包建具

## 伝統の技守る



## 今後の課題は後継者育成

「伝統の技術者たちはどこにのれん分けて、次々と独立していきました。この地域では三十業者くらい。小野や三木にも、明石屋の流れをくむ職人がたくさんいます。親方をたどっていくと、うちにたどり着く店も多いんじゃないでしょうか」

「後継者の育成。技術をもった職人を育てることです。マンションが主流になって、アルミサッシや合板を張り合わせたフラッシュドアの時代になっても、伝えていかなければならない技術があります。まだまだ和室を好まれるお客さんもたくさんいらっしゃいますから」

(河崎 光良)

×E 1893(明治26)年9月創業。明石屋建具製作所現在の株式会社の資本金1000万円。従業員15人。昨年度の売り上げは約1億5000万円。現在、主力商品は建具からフラッシュドアの注文製作に移っている。

い。今、昔ながらの材料と工法で大量生産する製品の十二で作れば、戸一枚の値段は、工十倍にもなりますよ」